

かたりべ 43

豊島区立郷土資料館だより

▶ JR大塚駅の架道橋の構造を探索する。(講師 賢田秀世氏)



◀まだあった！ 旧巢鴨町の下水道マンホールのふた
(巢鴨3-8-12と3-9-12の間の私道にて)

まちづくりの歴史をたずねて

この七月、資料館では恒例の地域史講座「江戸・東京のまちづくりを探る」を開催しました。近年、まちづくりや「近代化遺産」保存の動きが全国各地に見られるようになり、世間の関心を集めています。資料館では、こうした動きを踏まえて、東京や豊島区の「まち」がどのように築かれてきたのかについて、私たちの生活に深い関わりをもつ「土木」の視点から歴史的に見ていくことにしました。今回は入門編として「江戸のまちづくり」遺跡にみる江戸近郊「江戸・東京の下水道」「東京の都市計画と土木遺産」の講義(概論)と、「川・下水道」編、「橋・トンネル」編の見学を二回行ないました。今回は予想をこえる五〇名以上の参加申込みがあり、フィールドワークでは雨と酷暑にも関わらず、区内の土木遺産の探索を楽しみました。参加者からは「建物や遺跡などは前から興味があったが、下水道のことは始めて目を開かされた感じです。身近な事にも関心がもててくたはけないと思えました。」「人の歴史はよく読むが、土地や町の歴史はよく知らない。今回を機会に学んでいきたい。」などの感想が寄せられました。これからも住民が地域に関心を寄せ、地域を学ぶきっかけとなるような地域史講座を続けていきたいと思えます。

(横山)

特集 新館設立に向けて XVI

博物館の仕事ってナニ？

(10)

図書も博物館資料です！

このシリーズでは、博物館の仕事を様々な方面から紹介していますが、今回は図書資料の受入れ業務について述べましょう。

図書資料の大部分は確かに、いわゆる実物資料とは異なり特殊なものを除いては表舞台（展示室）に登場することはほとんどありませんが、これなくしては学芸員の調査・研究も十分に進まないという、いわば「縁の下の力持ち」的な存在として、博物館活動に欠かすことのできない性格の資料です。現在、郷土資料館には合わせて二万数千冊の図書が収蔵・配架されています。開館以来二二年間の活動の足跡を示して、ちょっとした歴史・民俗・地域関係の専門図書館の観がありますが、毎年一六〇〇冊前後づつ増えて、今や研究室は書庫兼作業室と化し、より有効な利用を可能とするためには、より良い整理・分類方法が求められています。

図書の種類と入手方法

当館では、受入れ図書を配架図書と貴重書とに大別し、それぞれの登録台帳に記入していま

す。配架図書はさらに郷土関係図書と一般図書、博物館学関係図書の三種に分けます。

①郷土関係図書 図書資料の中で一番大きな割合を占めていて、交換あるいは寄贈という形で取得しています。毎日のように都内、関東近県をはじめ、遠くは北海道から沖縄にわたる自治体・教育委員会・博物館・大学などから送られてくる自治体史、紀要、年報、展示図録、各種報告書などがここに属し、各地方・各機関の研究動向を知るための最新の資料であり、これに目を配ることで学芸員の調査・研究の参考にすることができまます。また民間の研究会や個人が編集・発行する郷土に関する図書（非売品）をご寄贈いただく場合も多く、これらは赤ラベルにて分類し、地域別に配架します。

②一般図書 一方、市販されている書籍で、当



館の調査・研究活動や、一般市民からのレファレンスに対応するのに必要な、各分野の辞書や事典類・研究書・資料集・豊島区地域に関する図書、或いは歴史関係の雑誌などは、主として購入によって収集し、これらは青ラベルにて分類し、主題別の配架をしています。

③博物館学関係図書 一般図書のうち博物館に関する書籍は、特例として橙ラベルを貼り、専用の書棚に配架します。

④貴重書 昭和三〇年以前の発行で再度入手が困難な書籍・雑誌類。図書としてよりも展示資料として活用できるものや、保存状態が悪く配架が困難なものなどを貴重書として受け入れまます。ここには江戸時代の地誌や明治から昭和初期の雑誌、豊島区制施行以前の町村誌など地域史研究の上で不可欠の資料が数多く含まれています。これら貴重書にはラベルの貼付や受入印の押印はせず、台帳の受入れ番号に対応したナンバーカードをはさみ、多くは中性紙封筒に入れて文書整理箱に収納し、収蔵庫に保管しています。豊島区関係の古い地誌類など利用者の閲覧希望が多いものは一般の図書とは分けて配架

してあります。貴重書の収集方法としては古書市・古書店からの購入が普通で、送付されてくる古書目録には注意を怠らないようにしていますが、昨今目指す資料がなかなか手に入れ難くなってきました。また区民からの寄贈によって取得した資料も貴重書の大きな割合を占めています。

目録の刊行と館独自の分類規定

ところで折角収集し、収蔵している図書資料も、その存在と価値を外部にも知らせ、有効に利用されてこそ、一層活きてくるものです。そこで「郷土関係図書目録」Ⅰ・Ⅱとして一昨年と今年三月に、東京都及び区市町村の図書目録（一九九三年一二月までの受入れ分）を刊行しました。ここには計五三〇〇冊が収録されていますが、ようやく収蔵図書の一部が公開されたのみで、しかもあえて分類番号も載せてありません。というのは、これまで（i）一般図書は日本十進分類法（NDC分類）に従う。（ii）郷土関係図書についてはその形式（例えば紀要・年報など）によってKa、Khに分け、それ以外は主題による分類K+NDCを用いる。所在地・発行地を自治体コードナンバーを用いて記入するという大まかな方針のみ決めてあったために、どうしても当館の蔵書の傾向に合わなくなってきたのです。また、NDCに忠実であればかえって、特定の調査研究テーマに沿って収

集したはずの図書が一所にまとまらなくなるといった不都合が生じ、早急に改良策を講じ、より利用しやすい独自の分類規定を決める必要があります。

そこで約半年の検討を経てようやくNDCに沿いつつも、この九月から新方針に従って分類番号を付すことになり、併せて過去の全ての配架図書についても見直しをすることになりました。次の図書目録には当館独自の分類規定を掲載できることと思います。

将来の問題

以上が図書資料受入れ業務の現状ですが、先に触れた通り十分な配架スペースが確保されていないのみならず、十分な閲覧スペースもないために、開架方式にして外部の利用に供することなどは、遠い将来の新館に託す夢でしかありません。しかし現在でも調査・研究の目的で図書の閲覧を申し込まれる方には、研究室に狭いながらも閲覧コーナーを設け、ご要望に応じています。

将来にむけては、全配架図書についての目録の刊行、コンピュータによる検索システムを確立すること、貴重書については保存状態に応じた修復を行なうこと、さらに有効活用のための検案分類も必要では、と課題は山積しています。今後時間をかけて一つ一つ問題解決に取り組んでいかななくてはならないでしょう。

（小池）

郷土資料館なんでもQ&A

Q 菓鴨の地名の由来は、昔この付近に川が流れていたからだと言いました。菓鴨駅周辺にそのような川は見当たりませんが、この話は本当なのでしょうか。

A 確かに菓鴨駅周辺には川は流れていません。しかし、隣の大家駅の近くには谷端川が流れていました。流路は今のガン研通りになり、現在では暗渠になっています。江戸時代からの菓鴨村の鎮守は大家駅の南口にある天祖神社で、菓鴨村の範囲は大家駅周辺にまで広がっていました。この谷端川沿いに池や沼があり、鴨が住んでいた可能性はありますが、それが地名の由来となったかどうかははっきりとはわかりません。菓鴨の地名は江戸時代以前からあり、戦国時代の「小田原衆所領役帳」では、北条氏の家臣恒岡弾正忠分として「江戸 菅面之内中丸」とあります。この中丸は現在の板橋区中丸で、谷端川の上流になります。中世の菓鴨は、中丸から大家にかけての谷端川沿いの耕地や集落をさしていたものとみられ、現在よりかなり広い範囲であったと考えられます。

慶長七（一六〇二）年成立の「中古日本治乱記」には、南北朝時代の応永（一三六八）年に、豊島氏も参加した平一揆鎮圧のために、関東管領上杉憲顕が「洲賀茂」に陣をとったという記事があります。平一揆の際の軍事行動についてはよくわからない点が多いのですが、菓鴨が鎌倉街道に近いことから、これが史実である可能性は高いと思われます。

（小林）

1996年度特別展

長崎村物語

—江戸近郊農村の伝承文化—

11月17日(日)まで好評開催中!

開催にあたって

今、何が「地域に伝えられる文化」で、それが、今後、どのような意味をもって伝えられていくのでしょうか。そのようなことを考える機会をもちたいということから、今回の特別展を開催いたしました。そして、タイトルに「長崎」とあるように、地域を特定し、その地域で育まれ、伝えられる文化の諸相を紹介することに重点をおきました。それが、この特別展の特徴でもあります。ここでいう「長崎」は、かつての長崎町（一九二六〜大正一五）年町制施行）であり、それ以前の長崎村（江戸時代から町制施行まで）にあたります。

展示内容について

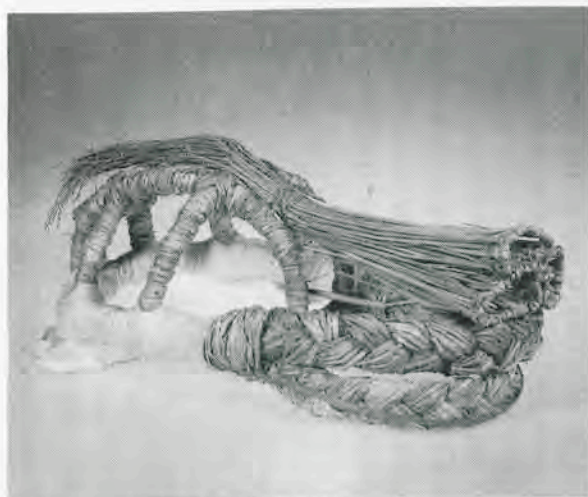
展示は、次の三つのコーナーで構成されています。

I 「くらしの環境」では、まず、江戸近郊に位置する長崎地域の景観の移り変わりを、今年、一九九六年九月に撮影した航空写真と、一九〇九（明治四二）年に測量した地図との対照からみていきます。そして、昭和初期撮影の民家の写真からは、「これが長崎！」と、思わず声を出してしまいます。それほど、今のまちの様子からは想像ができてなくなっているのです。

II 「生活の祈り」ですが、ここでは、長崎獅

子舞についての歴史と、伝承に努めている人たちの現在の姿を示しています。江戸時代から続いている獅子舞ですが、この獅子舞の本来の意味が「悪疫退散」であることが、現在、どの程度、人々のあいだで理解されているものなのかということも、展示を通して考えてみてください。

このコーナーの見所のひとつに、写真①の藁獅子があります。これは、藁を材料として作られているもので、獅子舞の練習の時に獅子頭の代わりに使うものです。頭につけるとどのような感触か、「実感」していただきたいと思い、自由に手にとってご覧いただけるように展示して



①藁獅子 1995年、栗田文子氏製作

あります。舞を習う人たちの工夫と「御獅子」に対する愛情を感じることが出来ます。

その他、長崎六丁目にあった稲荷神社に関する資料を、ところせましと展示してあります。これは、寛政一〇（一七八九）年の幟旗、文久二（一八六二）年の祭祀に関する記録等で、平成三（一九九二）年までの、およそ二百年の歴史を伝えるものです。今日まで大切に保管し、伝えてきた人々の気持ちに触れることが出来るでしょう。

また、「雨乞い」の行事に関することも、写真パネルや、青梅市の御嶽山の御師が所蔵する資料を通して紹介しています。長崎には、大河があるわけではなく、灌漑設備も十分ではなかったため、特に八月の降雨量が少ない場合には、陸稲（水稲は少なく多くは陸稲を作っていた）が不作になります。そこで、遠隔地の霊山といわれる、群馬県の榛名山、青梅市の御嶽山へ参拝し、そこから「霊水」をいただいできました。展示では、一九一八（大正七）年の雨乞いの例をもとに、当時の祈りの生活の一端を伝えます。

さて、現在の生活でも、さまざまな神社仏閣に参拝した際、「御札」をいただいでくるということはよくあります。そして、いただいできた御札を、神棚や家のなかの決まった場所に貼ります。ところで、その後、これらの御札をどう扱うでしょうか。何年もたち、御札の枚数が多

くなると、それらを俵や呎に入れ、それを天井や梁にくくりつけるといふ習慣があります。これは、全国的に見られる習慣で、もちろん長崎でもみられます。今回は、南長崎六丁目の高木家を例とし、この状況の部分復元を試みました。現在までの、およそ百年間にわたる一軒の家の民間信仰の実態を知ることが出来ます。

最後は、「III「明日へ伝える」のコーナーです。長崎地域にとつては、農業を基本とする生活が続いていましたが、そのなかで培われてきた伝統的な生活が次第に変わっていくこととなったきっかけは、大正期に始まると考えられる耕地整理といえましょう。この耕地整理は、曲がり



② 風 昭和初期製作 安田一郎氏所蔵 約144×98cm

くねった畦道をまっすぐにし、「自動車社会」の到来に備えるということが目的のひとつでした。そして、このことは、長崎の村（町）全体が行なった大事業として、現在でも語り継がれています。耕地整理前の地域の図面は、ほぼ、各字ごとに残されていますが、十三枚全部を資料館で展示することは、狭いので残念ながらもできません。「字西向」のみを見ていただくことにしました。この耕地整理と並行して、関東大震災以後、都心部から移転してきた人々によって人口が急増し、農地を住宅地化する過程で、従来から行なってきた年中行事や遊びが変わっていききました。長崎の冬の風物詩といえば「凧上げ」で、写真②は、麦畑を思いっきり踏みつけながら、大人も子どもも一緒に楽しんで上げた凧です。凧上げを経験した人のお話では、今、この大きさの凧を上げようとしても上げる場所がなく、学校の庭でも無理ということですが。

資料館の課題として

現在、家族構成や地域社会のありかたが問われ、変わっていくなかで、地域文化の継承に関して資料館が担う役目は大きくなってきているといえます。今後も、そのような視点から、より一層、地域資料の収集と調査研究を深め、よりよい形で、地域文化の存続について考えていきたいと思えます。

一九九六年歴史講座・『平和のための戦争学』から

郷土資料館では戦争体験の発掘と継承をめざして、これまで展示や講座などいろいろな取組をしてきました。今年は歴史講座「平和のための戦争学」と題して二回連続講演「日本軍の歴史―その戦略・戦術―」（講師 山田朗氏〈明治大学助教〉）と「亀井文夫の戦争ドキュメンタリー映画」上映とを行いました（八月二四・三一日、九月七日）。

今回の講演は日本軍そのものの実態を、とりわけ軍事思想や戦略・戦術・兵器などの面から考えようというものです。戦争をなくすためには、なぜ戦争が起きるのか、軍隊はどのような実態をもっているかを十分に理解して、それに向き合うことが必要です。それを歴史のなかで具体例をとおして学び、未来に役立てていきたいものです。

講座には私たちの予想を上回るたくさんの方の応募をいただき、会場定員の関係でお断りしなければならぬ方もありました。うれしい誤算ではありますが、区民の方々の問題意識を十分つかみきれないなかつたことを反省しています。

気鋭の軍事史研究者として著名な山田さんにはお忙しいなかをご無理をお願いしました。講演は「超弩級」の語源となったドレッドノート

級戦艦の話など世界の軍事史の流れのなかで、対外膨張主義（「利益線」思想）を背景に「白兵主義」と「艦隊決戦主義」に固まっていた日本軍の特徴を詳細な資料にもとづいて、分かりやすく話していただきました。

参加者の方のアンケートのなかから、「申込みされた動機」と「講座を聞いての感想」をいくつか紹介します。



ていきたいと思えます。（青木）
〈六九歳・男〉日本の軍隊がどの様にして膨大に成ったか知りました。

〈六四歳・男〉明治維新以来の歴史は全く教わ

らなかつたせいも、今でも近代史に興味があります。又軍部の上層部の考え方が少しでも知り得て、多角的に理解するよき材料になりました（世界の大国の動きの中の日本を考える上で）。

〈七八歳・男〉私も昭和十四年より中国の戦場第一線で歩兵部隊として参加して居りましたが、これほどくわしく知りませんでした。良いお話でした。

〈七三歳・男〉戦争体験のある世代の自分でも、まだ解らない事も沢山あり、もう一度勉強する良い機会と思い参加させていただきました。

〈七三歳・男〉非常に参考になりました。現在の米軍の占領軍（沖縄）は日本の満洲と同じです。世界平和の為此のような場がもつとあれば良いです。

〈三九歳・女〉母に「行ってみよう」と言われ、自分自身も改めて何も知らなかつたこと、何も習ってなかつたことに気付いたので、①明治の成立当初からして、この国の官僚機構・体制ですべてガチガチに固められている体質を改めて認識した②今回、いろいろな武器、戦艦、兵法などについてくわしくお話を聞いていますと、女の私さえワクワクさせられてしまう部分があり、これは危ない魔力ではないかと感じた。

〈一九歳・男〉今まで、英米などの国際戦略の中でこの分野を見て来たが、一つの視点として、新しい刺激があった。

区内には、主要な道の辻などに建てられた道標や人馬の供養塔などが、各所に残っています。そのなかで、江戸後期に行なわれた長崎村の道路整備の記念碑は、当時の土木工事の軌跡を知ることができる貴重なものといえます。

この記念碑は「舗石建立塔」といい、現在千早一―二三―三の地蔵堂内にあります。ここには「地蔵堂」という字名の由来となった、城西学園南側辻角の地蔵堂（坊）に祀られていたといわれる子育地蔵や、正徳四（一七一四）年長崎村の念仏講中により建立された霜田地蔵、大正一四年建立の馬頭観音が祀られています。

舗石建立塔については、関係文書などが残っていないため詳細は不明ですが、長年地蔵堂を世話する山上邦雄氏（一九一四年生まれ）によれば、戦前は現在地より少し池袋寄りの辻に、現在とは逆の東向きに建っていたといえます。正面下に「東ぞうしがや」、左側面に「左ほりの内道」、右側面に「右いたばし道」と刻まれており、道標をかねていたことがわかります。

建立年は「寛政十三辛酉（一八〇一）年二月吉日」、建立者は右側面に「武州豊嶋郡長崎村世話役講中 惣願主」、左側面に「武州豊嶋郡上板

橋村世話役講中」と刻まれており、そのいわれについて山上氏は次のように記しています。

「その頃の長崎村と上板橋村の農民・庶民の人々は北は中山道、川越街道、南は所沢街道（目白通り）等表街道を避けて、此所地蔵堂から池袋、雑司ヶ谷、音羽、江戸川橋を経て、江戸神田、日本橋の市場へ穀類や野菜や手芸品を売りに行き、帰りには肥料の馬糞や人糞を買い入れ、また生活必需品を買い求めてきた唯一の裏街道であり、庶民の専用道路であった由です。

しかしこの地蔵堂から谷端川の霜田橋先（立教大学下）までは底なしの湿地帯で、少しでも雨が降れば通行ができませんでした。故にその頃の両村の代表の人達が願ひ出て、また両村の人々が力を合わせて、但し大変なご苦労の上、先づ排水溝と土手を築き、茨城の方面から御影石（縦四尺余り・横二尺余り）を多数取り寄せ、この土手の通りに敷きつめ、これで人馬、荷車も通ることができたといわれます。この碑は其の敷石工事の完成の喜びの記念碑であります。」

（千早町二丁目町会会員名簿「昭和六一年」）
上板橋村・長崎村から地蔵堂をぬけ、谷端川に架かる霜田橋を渡り、現在の立教大学の南を

通り、JR山手線の踏切（長崎道踏切）を渡って雑司ヶ谷、神田方面へいく道は「長崎道」といわれ、農民の往来がさかんだったといえます。

谷端川流域ではしばしば洪水に悩まされていたため、交通の要所である橋の架設工事と周辺の道路整備は、近隣の村民にとって緊急の課題であったことは容易に推測されます。そのため両村が共同で谷端川の湿地帯（約100mの区間という）に石を敷き並べる大工事を実施し、何時でも人馬や荷車が通れるようにしたのでしよう。この工事の具体的な工程や敷石の調達方法など、今ではその詳細を知ることができませんが、建立塔の右側面には「ながさきに ながくもあるや 敷石の あらんかぎりは たみもよろこぶ」という歌が刻まれており、この工事の完成を村民がいかに喜んだかをうかがい知ることができます。

（横山）



舗石建立塔（高さ149.5×幅32.8×奥行22.5cm）

特別展開運事業のお知らせ

◇ 展示説明会

① 9月29日(日) 午後2時・3時30分

② 10月13日(日) 午後2時・3時30分

※事前申込み不要

2回とも当日展示室入口に集合

◇ 記念講演会

① 10月19日(土) 午後2時〜3時30分

「長崎村の歴史」

田島俊雄氏(岐阜大学名誉教授)

② 10月26日(土) 午後2時〜3時30分

「歌でつづる村の歳時記」

田島五郎氏(伝承者)

小野寺節子氏(民俗音楽研究家)

※定員…50名、電話申込み(先着順)

会場…勤労福祉会館 第6会議室

注目 / 千川上水通水100年記念事業

今年、元禄九(一六九六)年に千川上水が通水を開始して三〇〇年目にあたります。これを機に、当館では流域二区(練馬・板橋)と協力して記念事業を開催しています。

◇ 千川上水フィールドワーク

① 9月3日(火) オリエンテーション

② 9月8・15・22・29日の日曜日

フィールドワーク(武蔵境〜巣鴨)

◇ 記念特別展

① 9月21日〜10月20日 板橋区立郷土資料館

② 11月1日〜11月14日 練馬区郷土資料室

③ 11月24日〜12月15日 豊島区立郷土資料館

◇ 記念シンポジウム

12月1日(日) 午後1時30分〜4時

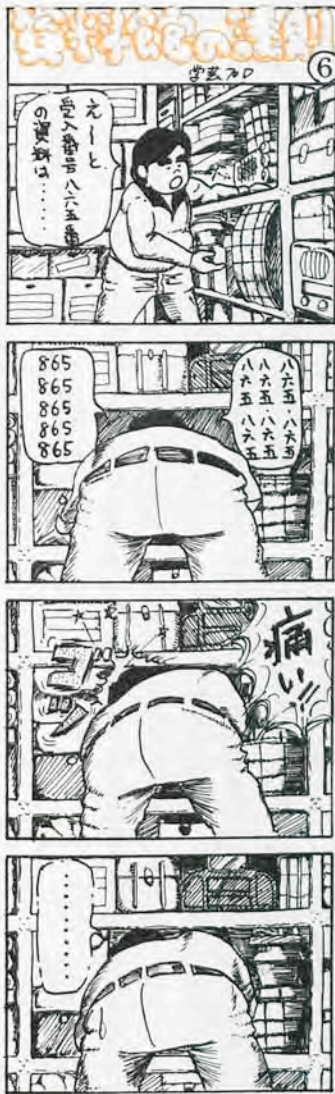
※詳細は当館まで(月曜・祝日・第3日曜日休館)

編集後記

食欲の秋を迎えました。かたりべ43号をお届けいたします。特別展も無事オープンし、順調な滑り出します。今回は「長崎村物語」の展示紹介をはじめ、久々の連載物「新館設立に向けて」「豊島をさぐる」など盛りだくさんの内容となっています。

* * *
 本号編集中の9月23日、「ドラえもん」「パーマン」など数多くの名作を生んだ漫画家の藤子・F・不二雄(本名 藤本弘)さんが亡くされました。手塚治虫、寺田ヒロオに続き、また一人「トキワ荘」のヒーローがこの世を去ってしまつた。中学時代に「ドラえもん」のアニメと単行本に熱中したファンとしては、とても残念です。ご冥福をお祈りいたします。

* * *
 10月11日から24日まで、博物館実習が行なわれます。職場に新鮮な風が吹き込み、若さがまぶしく感じられる二週間です。(Y)



かたりべ
 No.43

1996年10月20日

豊島区立郷土資料館
 豊島区西池袋2-37-4
 電話03-3980-2351

豊島区広報印刷物L30-07-073
 本紙は再生紙を使用しています